



生涯学習だより

令和元年度 第41回 「少年の主張」 安中市大会 最優秀賞作品

「詩から学ぶ想像力」

松井田南中学校 三年 小島 未大

ねがいごと たんぽぽ はるか

あいたくて

あいたくて

あいたくて

あいたくて・・・

きょうも わたげを とぼします

工藤直子さんの詩集「のはらうた」の一節です。こんな短い詩の中に、どれほどの世界が広がっているでしょう。私たちの頭の中には、春のぼかぼかした陽気、コンクリートのひび割れに咲いたんぽぽ、たんぽぽを摘んで綿毛を吹く女の子、様々な世界が広がってきます。

しかし、私はそれらを映像化した作品を観たいとは思いません。おそらく、プロの制作者が集まれば、感動的な映像が完成するでしょう。綿毛が青空に飛び上がるその瞬間の一枚に、文が次々と浮かび上がっていき、朗読者の声が響き渡ります。そして観客はこう言います。

「ああ、いい詩だなあ。」
・・・しかし、それだけです。

多くの人は映像に見とれ、その後先ほどの私のような、新たな想像はしません。映像を見た感想だけ述べて、頭の隅に追いやられまです。いくら素晴らしい映像を前にしても、そこから何も考えず、何も想像しなかった時に得る感動は、どこか空虚なものであるのではないのでしょうか。

読書と映像、この二つの違いはまさしくそこにあるのです。想像力が、必要か必要でないか、それが何よりの違いなのです。

最近、私の周りではインターネットを通じて動画を投稿・閲覧・視聴できるサービスが流行しています。それらは、私たちに一方的に情報を与えてくれ、考えていく必要が少ない分、娯楽を気軽に楽しむことができます。一方読書では活字一つ一つを注意深くたどり、その意味を考えるとという作業を必要とします。先ほどの『はらうた』の「わ」「た」「げ」。一音ずつでは意味をもたないその言葉が「わたげ」となって想像の中で白くて儂い小さな植物として生まれてきます。意味をもたない

一字一字が、想像の世界の中では鮮やかな色彩をもつて頭の中のキャンバスに描かれるのです。そして私たちの感情は、想像の世界の人物への愛や哀しみによって動かされるのです。

「想像力」その言葉を聞いて、私だったら、夜寝る前ベッドで目を閉じている自分の姿を思い出します。「今日はこんなことがあったな。明日はこういう風になりたいな」と想像するのです。まだ見ぬ未来のビジョンを思い描くとき、言いようのないワクワクした気持ちになります。

これからの時代、想像力は今よりもっと重要なものになります。AIが仕事で大幅に導入され、見聞きしたことを再現すれば生き残れる時代ではなくなってきたからです。相手は自分に何を求めているのか、今の方法ではどんなリスクがあるのか、どんな順序が最も効率が良いのか、このような課題解決には・・・そう、想像力が必要なのです。

もし、これらの課題に、パソコンやスマホを使い続けていたら・

・・・？確かにそれら自体は非常に便利なものです。しかし、いつでもどこでも自分で考える前に、まず検索。その便利さに依存し続けると、そのうち「想像力」のない大人になってしまうでしょう。

さあ、手元のスマホを一冊の本に変えましょう。あなたが秘めている、その無限の可能性は、その本に眠っているかもしれない。頭の中を鮮やかな色彩でいっぱいにしてみませんか。

あいたくて
あいたくて
あいたくて
あいたくて・・・
きょうも わたげを とぼします

今年度の「少年の主張」安中市大会およびスプリングフェスティバル・地区文化祭・地区生涯学習のつどいなどは新型コロナウイルス感染症の拡大防止のため、中止とします。